



銅鑼

歴史と特色

銅鑼は古代ジャワ、スマトラの南方民族の打楽器にはじまり、中国、朝鮮を経て渡来したものとされている。日本では出船の合図や茶の湯で使われてきたもので、金沢では、茶道の普及に伴って製作されるようになった。

この銅鑼作りに打ち込んだのは人間国宝の故魚住為楽氏で、仏具の中の砂張の鈴の鑄造研究からヒントを得て銅鑼の製作を始め、その抜群の音響は高い評価をうけていた。

材料の砂張は、金属鑄物の中でもっとも難しいといわれている銅と錫の合金で、100対26が音響を良くする絶対条件である。現在この技法は孫にあたる兄弟によって継承されている。

HISTORY & FEATURES

Gongs were introduced from China and Korea into Japan, and used for announcing times of sailings, and for the tea ceremony. Iraku Uozumi started production of gongs in Kaga, inspired by the bell used in Buddhist ceremonies. Gongs are made of alloys of copper and tin in the proportion of 100 to 26, which is the absolute condition for producing a good sound, and the alloying technique is said to be the most difficult in casting.

情報 INFORMATION

主な生産地	金沢市 (Kanazawa City)
主な製品名	銅鑼、茶道具、鈴、花生 (Gongs, tea ceremony utensils, bells, vases)
主な生産者	魚住安彦 (Yasuhiko Uozumi)、魚住安信 (Yasunobu Uozumi) 〒920-0865 金沢市長町1-7-14 TEL (076) 221-7390



歴史と特色 *Nanao Japanese Candles*

ろうそくは仏教の普及とともに、仏壇に使う灯りとして広まったものと言われている。当初は舶来の貴重品であったが、江戸時代に原料の油をとるハゼの木の栽培が奨励され、提灯の普及に伴って国産の安価なるろうそくが日本各地で作られるようになった。

七尾は天然の良港として昔から栄え、北前船により九州、東北各地にまでろうそくが販売されていた。

明治30年代に西洋ろうそくが入ってきてからは、価格面で格差が大きく、電灯の普及等で次第に作られなくなり、現在は仏事や祭礼用として1社が製造している。蘭草の髄と和紙で作った芯に、植物性油から採った白ろうを手で塗り重ね、太くしていく伝統の手作り技法を伝えている。

HISTORY & FEATURES

As Buddhism spread, candles came to be used as lighting for Buddhist altars. Candles were also used for paper lanterns in the Edo period, and the cultivation of Japanese wax trees was promoted. Because Nanao was a port town for Kitamae-bune ships, Nanao candles were transported as far as the Kyushu and Tohoku districts. One company in the city maintains the traditional production technique, using thoroughwort stem, Japanese paper and vegetable wax.

情報 INFORMATION

主な生産地	七尾市 (Nanao City)	主な製品名	和ろうそく (Japanese candles)
主な生産者	高澤ろうそく (Takazawa Candle) 〒926-0806 七尾市一本杉町11 TEL (0767) 53-0406		

七尾和ろうそく